

女子学生の親子関係に見る現代社会の子育て力

大阪学院大学 莊巖舜哉
関西学院大学 莊巖（赤尾）依子

Coming fostering power through the child-parents interaction during her school age of Japanese female students

Osaka Gakuin University SOGON, Shunya
Kwansei Gakuin University SOGON, AKAO, Yoriko

偏差値で見ると相当に格差のある2つの大学に在籍する女子学生たちの子ども時代の回想を下に、どのような親子関係であったのかを調べた。OGUの女子学生たちは勉強に関連してその父親から頻りに叱られていたが、NWUの女子学生たちは勉強ではなく、家事・手伝いなどで母親から叱られることが多かったと報告した。NWUの女子学生たちは、自分も親になったときには父親のような子育てを参考にしたいと考えているのに対して、OGUの女子学生たちは友だち関係のような親子関係と意識していることが明らかになった。

【キー・ワード】 親子関係, しつけ, 人生の生き方, 大学間偏差値格差

Parents-child relationships during school age were investigated, based on the memory of two different Universities female students, OGU and NWU. The standard deviation of entrance examination evaluated by the Yoyogi seminar is maximally 18 points differences between two universities, and the OGU is easier to enter than the NWU. Female students of OGU were often scolded by their father as regards their school work. In contrast, Female students of NWU were often scolded by their mother as regards their household work. Total item number of scolds by their parents were more frequently in OGU female students than NWU students. Students of NWU are more respecting and want to model their father's discipline than OGU students. In contrast, the relationships of student-parents of OGU are more friend-like relations than NWU student-parents' it.

【 Key Words 】 Parents-child relationships, Discipline, Life style, Difficulty of entrance examination

問 題

今回調査した女子学生たちが誕生したのが昭和 59 (1984) 年前後である。その頃の生涯特殊出生

率は1.8前後であったが、1980年にいったん底を打った後、やや回復の兆しを見せていた。翌年の経済白書に、「経済が着実な拡大を続け、成長率も5.7%と第一次石油危機以来最も高くなった」と自賛気味に書かれていたこととわかるように、経済は右肩上がりの成長パターンを示していた。ただこの年を境に、家庭の貯蓄率は低下を始め、消費性向を強めていく。

このような消費社会のまっただ中に生まれた子どもたちであるが、彼女たちが小学校に入学した頃（1990年）、子どもに家事などの仕事を手伝わせると回答した親は、その10年後よりも遙かに少なく、10.4%であった。当時は既に、1950年代や60年代前半のように、学校から帰るなりカバンをほうり投げて遊びに出るといった風景はなかったが、それでも子どもにはまだ遊びの空間が残されていた。子どもたちが主に遊んだ場所は友だちの家（65.5%）、公園（57.0%）、児童館など児童施設（37.2%）、家のまわり（36.8%）であり、屋外で、また友だちとの遊びが中心であった（ベネッセ子どもの遊び調査：厚生労働白書平成15年版）。

ところが同じ項目で調査がおこなわれた10年後の平成12（2000）年には、子どもたちの遊び場所は自分の家が群を抜いて増加しており（74.5%）、順位は友だちの家と入れ替わる。1990年にはわずか8.2%の子どもたちが、いつも遊ぶ場所として自宅を選択したのに過ぎないのだが、10年で子どもたちは家の外にさえ出なくなったのである。この調査を参照する限り、今回調査対象とした女子学生たちが小学校低学年であった頃、子どもたちはまだ外遊びをしていたことがわかる。

この1990年頃の親子関係がどのようなものであったかを物語る資料がある。NHKによっておこなわれた世論調査であるが、本調査でも尺度として利用した、「何でも話し合える、友だちのような親でありたい」という親子関係を理想としている親が、1984年の調査では父親に53%、母親に78%であったのに対して、1989年ではそれぞれ59%、84%と6%ずつ増加し、逆に尊敬されるような権威のある親というのは7%と6%減少している（NHK世論調査部、1990）。友だち親子が増え続けているのである。

私立O学院大学学生を対象とした荘厳・荘厳（2003）の先行研究でも、友だちのような親子関係は男子学生・女子学生それぞれに自分の理想とする親子関係の第2位につけており、調査時点で平均年齢20歳であった被験者たちの10年前の親子関係が、89年のNHK調査にそっくり写し出されている。では、前回は問題とした叱られた経験について、親側から言えば叱るという行為に対して、子どもの側にはどのような意識が形成されていたのであろうか。

前出の世論調査によると、子どもの「言葉遣いや行儀に注意するほうだ」と思っている父親は、89年度時点で66%、母親は81%であった。子どもの方からは同じ項目に対し、49%が父親から注意をされていると思ひ、母親からは63%が注意されていると思っていた。勉強や成績については同じく父親の14%、母親の32%がうるさく言う方だと思ひ、逆に子どもたちは父親に対して21%がうるさく言われていると評価し、母親に対しては40%がそう評価していた。しつけに対しては27%の父親と34%の母親が厳しい方だと思っており、逆に子どもたちは父親の29%と母親の42%が厳しいと評価していた。子どもたちは行儀作法について親がしていると思うほどにはされていると感じておらず、逆に勉強について親がしていると感じている以上にされていると感じていたのである。

荘厳たちの先行研究では、小学生時代に父親から叱られたと思った男子学生は、叱られた項目が複

数回答なので総度数の中の何%という表記しかできないが、言葉遣いや行儀に関してはそれぞれ男子学生の30%と38%が父親から叱られたと回想していた。一方、母親からは23%と39%が叱られたと回想していた。もちろん調査内容が異なるので即これを、NHKの世論調査に対応させることはできないが、ほぼ等しい関係にある。

ところが勉強に関しての89年の世論調査と、この時代に小学校に入学した学生たちの記憶に基づく荘厳たちの先行研究との間に、だいぶ食い違いが見られる。荘厳たちの先行研究では、男子学生はその51%が小学校時代に父親から叱られたと回想しているのである。母親から叱られたと思っている学生は、なんと81%にも達しているのである。従って2つの調査の間に見る差異は、親と子どものそれぞれの主観の違いが作り出すものか、あるいはO学院大学に学ぶ学生たちの特殊な現象なのかを検討される必要がある。

同様のことが女子学生に対してもいえる。荘厳たちの先行研究では、女子学生の33%が父親から叱られたと思っていたし、母親からは53%が叱られたと思っていた。男子学生よりは少ないが、それでもNHK調査に比較すると、叱られたと思っている比率が多いのである。そこで今回は、2つの異なる大学に在学している女子学生を対象に、先行研究と同じ内容の調査を実施し、その傾向の違いを分析することにした。その理由は大学間格差にある。

現在の日本の大学は偏差値によって見事に輪切りにされているが、今回調査対象とする私立O学院大学の偏差値が一番難しい学部で46、易しい学部で40である。しかし実体は全入に近い。一方N女子大学は調査時点では国立であり、の一番難しい学部・学科で偏差値が64、易しい学部・学科で52の評価を受けている。このように、今回調査対象とする大学間にはその難易度にかかなりの差がある(代ゼミ調べ、2003年度)。

偏差値が学生の生活習慣を含め、勉強に対する動機づけや交友関係、アルバイトの形態など、様々な周辺環境を示唆するものでも、また予測させるものでもないことは当たり前である。しかし、このような周辺要因が学生たちに何の影響も与えていないわけではない。そこで一つの要因として、高偏差値の大学に進学していく学生と全入に近い大学に進学していく学生に、親から受けるしつけのあり方や教化の与え方に違いがあるのか否か、これを検討する必要があると感じた。当然、男児と女児に対しては親はしつけを含む社会化のあり方に、それぞれ異なる方略を採用している可能性があるので、今回は女子学生に限定して比較・検討をおこなう。

方 法

被験者： O学院大学の女子学生167名、N女子大学の学生202名が参加した。質問紙は平成14年11月中に配布され、無記名で回収された。O学院大学の被験者は荘厳・荘厳(2003)の160名に加えて、後に収集された7名を追加した。O学院大生の平均年齢は20.1歳、N女子大生の平均年齢は19.3歳であった。

調査項目： 本調査では荘厳・荘厳(2003)で使用した質問紙を用いた。以下、質問項目のアウトラインを説明する。子どものしつけは、モデリング対象としての自分を示すことから始まる。その際に重

要なことは、ほめる、あるいは叱ることによって、望ましい行動を強化、または消去していくことにある。従って本調査ではまず、子ども時代にどのような内容で父親および母親から叱られたのかを聞き出す設問を用意した。同じ設問を、今度は父親および母親からほめられた経験として利用した。

チェック項目は、1)勉強、2)家事・手伝い、3)交友相手、4)趣味・興味、5)生活態度、6)行儀作法、7)言葉使い、8)きょうだいけんか、9)記憶なしの9カテゴリーを用意し、複数回答を認めた。更にその強さと頻度について、印象を尋ねた。

設問の5から13では、感情面を含むしつけのあり方について質問した。回答の選択肢は3件法であった。設問14では、理想的な親子関係について質問した。選択肢は、1)会話の多い友達のような関係、2)進路を指し示す灯台のような関係、3)ライフ・スタイルが一緒、4)仕事中心ではなく、家族と一緒にいる、5)独立した価値観で互いに尊重する関係の5項目を用意し、内1項目を強制選択させた。設問15では、父親と母親それぞれの、家族に対する貢献度を、1)家計、2)まとめ役、3)社会における活躍、4)社会への貢献、5)家事労働のそれぞれについて、100点満点で何点の評価をつけるか、また総合点を100点満点で何点に評価するかと尋ねた。

設問16で、必ずしも両親一緒である必要はないが、何歳まで親と一緒に部屋で就寝したかを尋ねた。年齢は7段階に区分し、最初の分離時期を2歳からに設定した。設問17では、親とのコミュニケーション量を、現在を含めて7年齢段階で質問した。それぞれの年齢において、非常に・普通・あまりないの3件法で回答を求めた。

設問18から20までは、困ったときに友達が親か、どちらに相談するかをケース別に尋ねた。また、設問21では、親と友達のいずれが大切か、22では親が自分を愛してくれていると思うか、親子関係の繋がりの強さについて質問した。これらいずれの項目においても3件法を採用した。

結 果

図1は、O学院大生とN女子大生が報告した、父親に叱られた経験のヒストグラムである。項目への

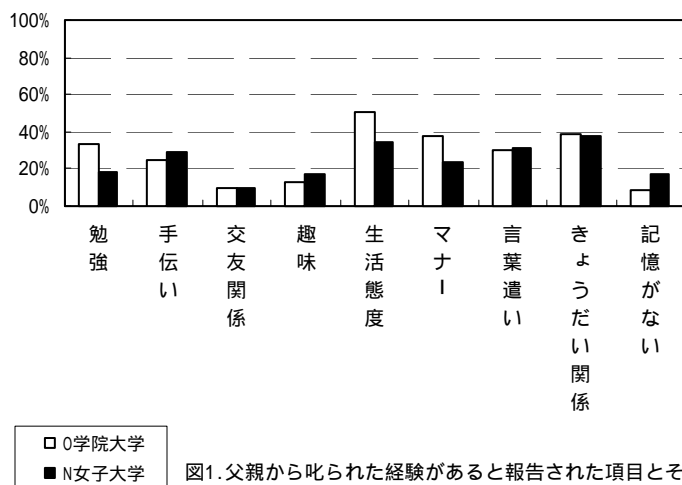


図1. 父親から叱られた経験があると報告された項目とその頻度

の回答は複数回答が認められているので、O学院大生が叱られた総度数は397となり、叱られた記憶がない15名を除外すると、1人平均2.61項目に父親から叱責を受けたことになる。一方、N女子大生の叱られた総度数407から記憶がない34名を除外すると、1人平均2.42項目について、同じく父親

から叱責を受けたことになる。両者を U テストにかけたところ、 $p < .02$ で有意差が認められた。つまり、O 学院大生の方が父親から叱られた経験が多いと評価している。

O 学院大生は生活態度に関連した内容で父親から叱られた経験者が一番多い。生活態度に関して叱られた者と叱られなかった者の比率の差を、Binomial テストで検定した結果、有意差は認められなかった。以下、比率の差の検定には全て Binomial テストを用いるので今後は名称を表記せず、かっこ内に有意水準のみを示す。

O 学院大生で、勉強に関連して叱られたと回想した者は、叱られなかったと回想した者よりも少なかった ($p < .001$)。家事・手伝いに関しても叱られた経験をもつ者が少なく ($p < .001$)、交友相手に関しても叱られていない者が多かった ($p < .001$)。趣味・興味に関連して叱られた経験をもたない者が多く ($p < .001$)、マナーや好き嫌い ($p < .002$)、敬語や言葉使いでも叱られていない者が多かった ($p < .001$)。またきょうだい関係に関しても叱られていない者が多かった ($p < .006$)。父親から叱られた記憶がないと答えた者は少なかった ($p < .001$)。

N 女子大生が父親からよく叱られた事柄は、きょうだいに関連した内容が一番多く、38%が叱られた経験があると回想した。叱られた者と叱られなかった者の比率の差を検定したところ、勉強に関連した内容に有意差が認められ、叱られていない者の方が多かった ($p < .001$)。以下、家事・手伝い、交友相手、趣味・興味、生活態度、マナーや好き嫌い、言葉や敬語使いの全ての項目にわたって、父親から叱られた経験を持たない者の方が、持つ者よりも 0.1%水準で多かった。また、きょうだい関係でも、叱られていない者が多かった ($p < .001$)。叱られた記憶がないと答えた者は少なかった ($p < .001$)。

叱られた内容について、学生間の差を見るためにピアソンの 二乗検定をおこなったところ、勉強に関連した内容において、O 学院大生の方が N 女子大生よりも父親からよく叱られていた ($\chi^2 = 9.67$, $df = 1$, $p < .002$)。また、生活態度に関連する内容でも、O 学院大生の方が父親から叱られたと回答した ($\chi^2 = 9.20$, $df = 1$, $p < .003$)。マナーや好き嫌いに関する内容でも、O 学院大生の方が叱られたと回答した ($\chi^2 = 7.80$, $df = 1$, $p < .006$)。叱られた記憶がないと回答した N 女子大生は、O 学院大生よりも多かった ($\chi^2 = 4.89$, $df = 1$, $p < .03$)。家事・手伝いに関連する内容を始め、他の 5 つの項目には両大学の学生間に有意差は認められなかった。

父親の年代を 50 歳以上と 50 歳以下に分け、それぞれの年代の父親たちがどのような内容で子どもを叱ってきたのかについてピアソンの 二乗検定にかけたが、50 歳以上と以下の間に有意差は認められなかった。

図 2 は、O 学院大生と N 女子大生が報告した、母親に叱られた経験のヒストグラムである。用意された選択肢は父親の場合と同じであり、また複数回答も認められているので、O 学院大生が母親から叱られた総度数は 557 となる。母親から叱られたことがないと答えた学生は 11 名いるので、これを回答者総数から除外すると、一人平均 3.57 項目について叱られた経験をもつ。N 女子大生は母親から叱られたことがない者が 4 名いるのでこれを除外し、総度数 749 を割ると、一人平均 3.78 項目について母親から叱られていた。母親から叱られた項目数について、両大学の学生間に差は認められなかった。

叱られた経験の比率の差を検定したところ、O学院大生は交友関係に関連した内容で母親から叱られていない者が多く ($p<001$)、趣味・興味関連 ($p<001$)、更にはマナーと敬語に関しても叱られて

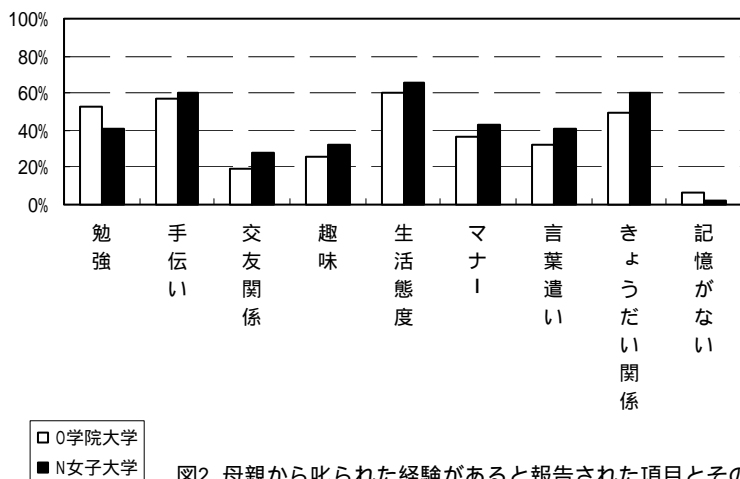


図2. 母親から叱られた経験があると報告された項目とその頻度

ていた経験がない者が多かった ($p<001$)。一方、その生活態度に関連して、叱られた記憶を持つ者が持たない者よりも多かった ($p<009$)。母親から叱られた記憶があると答えた者は、記憶がないと回答した者よりも多かった ($p<001$)。勉強関連、家事・手伝い関連、きょうだい関連では、叱られた者と

叱られなかった者の数に有意差は認められなかった。

叱られた経験の比率の差を検定した結果、N女子大生は母親から家事・手伝い ($p<004$)、生活態度 ($p<001$)、きょうだい関係 ($p<007$) に関連した内容で叱られているが、勉強 ($p<02$)、交友相手 ($p<001$) や趣味 ($p<001$)、あるいは敬語など ($p<01$) に関連した内容では叱られていない者が多かった。マナーに関連した内容では、叱られた経験をもつ者ともたない者の間に有意差は認められなかった。また、叱られた記憶があると答えた者は、ない者よりも多かった ($p<001$)。

母親から叱られた内容について、ピアソンの二乗検定で両大学の学生間の差を検定したところ、O学院大生がN女子大生よりも勉強関連でよく叱られていた ($\chi^2=4.95, df=1, p<03$)。逆に、きょうだい関係ではN女子大生よりも叱られることが少なかった ($\chi^2=3.85, df=1, p<05$)。生活態度関連などその他の項目に関しては、学生間に有意差は認められなかった。叱られた記憶がないという項目に関しては、N女子大生の方が叱られていないと回答していた ($\chi^2=4.97, df=1, p<03$)。手伝い・家事に関連する内容を始め、6項目には両大学の学生間に有意差が認められなかった。

父親の年代を50歳以上と50歳以下に分け、それぞれの年代の男性を夫にもつ母親たちが、どのような内容で子どもたちを叱ってきたのかについてピアソンの二乗検定にかけたところ、どの項目においても有意差は認められなかった。

叱られたのと同じ項目について、逆に、親からほめられた経験も聞き出した。

図3は、O学院大生とN女子大生が報告した、父親からほめられた経験のヒストグラムである。O学院大生が父親からほめられた総度数は274で、ほめられた記憶がない学生が38名おり、これを総人数から除外すると、1人平均2.12項目についてほめられている。O学院大生で叱られた記憶がないと回答したのは15名であったが、逆にほめられた記憶がないと回答した者は38名なので、2.5倍以上の学生が父親からほめられたことがないと感じている。

N 女子大生が父親からほめられた総度数は 375 で、ほめられた記憶がないと回答した 34 名を除外

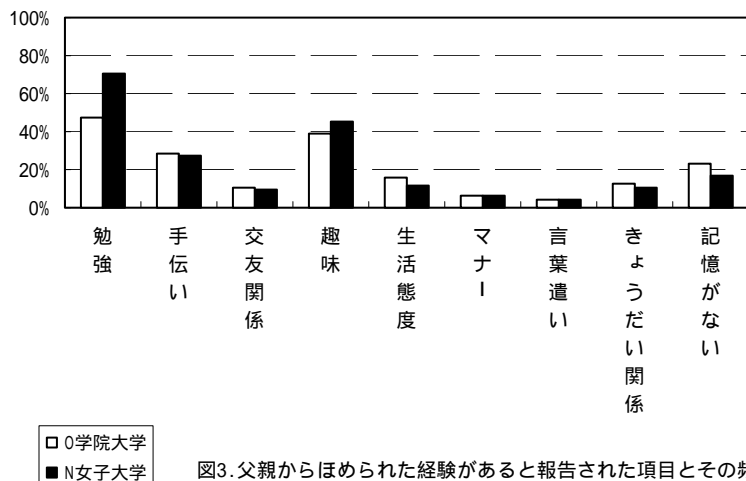


図3. 父親からほめられた経験があると報告された項目とその頻度

して計算すると、1 人平均 2.23 項目についてほめられている。N 女子大生は O 学院大生とは異なり、ほめられたことがないと回答した者が、叱られたことがないと回答した者と同数 (34 名) であった。父親からほめられた度数に関して、

両大学の学生間に差は認められなかった。

ほめられた経験の比率の差を検定した結果、O 学院大生では家事・手伝い関連で父親からほめられていない者が多く ($p < 0.01$)、以下、交友相手、趣味・興味関連、生活態度、マナー、敬語・言葉使い、きょうだい関連でもそれぞれ、0.1% 水準でほめられた経験を持たない者が持つ者よりも多かった。勉強関連では、2 条件間に有意差は認められなかった。ほめられた記憶がないと答えた者は少なかった ($p < 0.01$)。

N 女子大生の、父親からほめられた経験について比率の差を検定した。その結果、勉強関連では、ほめられたと答えた者が多く ($p < 0.01$)、逆に、家事・手伝い、交友関係、生活態度、マナー、敬語・言葉使い、きょうだい関係のいずれの項目においても、0.1% 水準でほめられた経験のない者の方が多かった。趣味・興味に関連した内容でもほめられた経験を持たない者が多かった ($p < 0.06$)。また、ほめられた経験がない者は少なかった ($p < 0.01$)。

ほめられた内容について、ピアソンの 二乗検定で学生間の差を検定したところ、N 女子大生は O 学院大生に比べ、父親から勉強でほめられていた ($\chi^2 = 21.04, df = 1, p < 0.01$)。その他の項目には、大学間で差がなかった。

父親の年代を 50 歳以上と 50 歳以下に分け、それぞれの年代の父親たちがどのような内容で子どもたちをほめているのかについてピアソンの 二乗検定にかけたところ、50 歳以下の父親の方が 50 歳以上の父親よりも、勉強に関連した内容で子どもをよくほめていた ($\chi^2 = 7.29, df = 1, p < 0.07$)。また、手伝い関しても 50 歳以下の父親の方が子どもをほめていた ($\chi^2 = 5.40, df = 1, p < 0.03$)。ほめられた記憶がないと回答したのは、50 歳以上の父親をもつ学生の方が、50 歳以下の父親をもつ学生よりも多かった ($\chi^2 = 7.41, df = 1, p < 0.07$)。

図 4 は、O 学院大生と N 女子大生が報告した母親からほめられた経験のヒストグラムである。O 学院大生が母親からほめられた総度数は 399 で、ほめられた記憶がない学生が 19 名あり、これを総人数から除外すると、1 人平均 2.7 項目についてほめられている。O 学院大生で母親からほめられた記

憶がないと回答したのは 19 名であった。N 女子大生は、543 総度数母親からほめられた。ほめられた記憶がないと回答した者が 17 名いるので、これを除外して計算すると、1 人平均 2.94 項目について

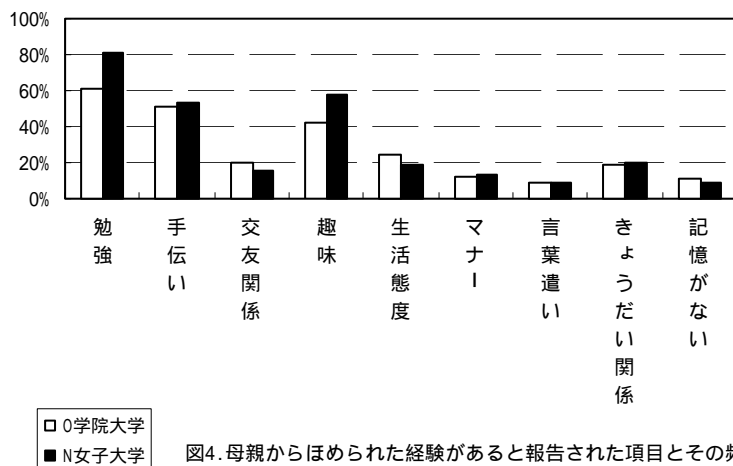


図4. 母親からほめられた経験があると報告された項目とその頻度

ほめられている。母親からほめられた度数に関して、両大学の学生間の差は認められなかった。

O 学院大生について比率の差を決定した結果、勉強に関連した内容で母親からほめられた者が、ほめられたことがない者よりも

多かった ($p < 006$)、交友関係、生活態度、マナーや好き嫌い、敬語や言葉使い、きょうだい関係のそれぞれの項目において、ほめられた記憶をもつ者がそれぞれ逆に少なかった ($p < .01$)。手伝いに関連した内容、それに趣味や興味に関連した内容には、有意差は認められなかった。母親からほめられたことがないと回答した者は少なかった ($p < 001$)。

N 女子大生について比率の差を決定した結果、勉強に関連した内容で母親からほめられたと回答した者が多かった ($p < 001$)。家事や手伝いに関連した内容には有意差は認められなかった。その他の項目、つまり交友関係と生活態度、マナーや好き嫌い、敬語や言葉使い、きょうだい関係においてはそれぞれ 0.1%水準で、趣味や興味に関する内容では 0.4%水準で、ほめられた経験がない者が多かった。また、母親からほめられた記憶がないと答えた者は少なかった ($p < 001$)。

母親からほめられた内容について、ピアソンの二乗検定で学生間の差を決定したところ、勉強に関連した内容で O 学院大生より N 女子大生の方がほめられたと回答している者が多かった ($\chi^2 = 18.13, df = 1, p < 001$)。また、趣味や興味に関する内容でも O 学院大生より N 女子大生の方がほめられたと回答している者が多かった ($\chi^2 = 8.43, df = 1, p < 004$)。その他の項目に関しては、有意差は認められなかった。

父親の年代を 50 歳以上と 50 歳以下にわけ、それぞれの年代の男性を夫にもつ母親たちが、どのような内容で子どもたちをほめてきたのかについてピアソンの二乗検定にかけたところ、敬語や言葉使いについて、50 歳以下の男性を夫にもつ母親の方が子どもをよくほめていた ($\chi^2 = 5.14, df = 1, p < 03$)。その他の項目については有意差が認められなかった。

設問 5 から 10 は、しつけのあり方についての質問である。それぞれの項目につき二乗検定をおこない、O 学院大生と N 女子大生の回答傾向を分析した。設問 5、設問 6 に関して、グループ間に差が認められた。

設問 5 は、あれこれ命令をされたと感じていたか否かに対する質問である。回答はそれぞれ「いつ

も", "たまたま", "記憶なし"の3段階評定で求めたが, 統計処理上, いつもとたまたまを"命令された"群にまとめ, 命令された記憶がない群と比較した。ピアソンの二乗検定の結果, O学院大生とN女子大生間に有意差は認められなかった。比率の差の検定では, O学院大生, N女子大生共に, 父親からも, 母親からも命令されたと回答した者が多かった(順に, $p<0.02$, $p<0.001$, $p<0.05$, $p<0.001$)。なお, 父親への回答欠損値はO学院大学に1, N女子大学に1あり, 母親への回答欠損値はN女子大学に1あった。

設問6は, 食事や行儀作法, 人前での振る舞いについてのしつけを受けたか否かに関する質問である。設問5と同様, 回答は3段階評定で求めたが, 統計処理上, いつもとたまたまを"しつけを受けた"群にまとめ, "記憶なし"群と比較した。ピアソンの二乗検定の結果, O学院大生の方が, N女子大生に比べ, しつけを受けた記憶があると回答した者が多かった($\chi^2=4.82$, $df=1$, $p<0.03$)。比率の差の検定では, O学院大生, N女子大生共に, 受けたことがないと回答した者が受けたことがある者より多かった($p<0.001$)。なお, 父親への回答欠損値はO学院大学に1, N女子大学に1あり, 母親への回答欠損値はN女子大学に1あった。

設問7では, しつけに伴う体罰を尋ねた。O学院大生では, 父親から受けた叱責に体罰が伴ったと報告した者は少なかった($p<0.002$)。N女子大生でも父親からの体罰があったと報告した者は少なかった($p<0.001$)。同様に, いずれの大学生も, 母親からの体罰が伴った者も少なかった($p<0.05$)。なお, 父親への回答欠損値はO学院大学に14, N女子大学に14あり, 母親への回答欠損値はO学院大学に13, N女子大学に15あった。

設問8は, 注意や叱責を受けたときの親の感情の強さに関する設問であったが, 父親が感情をむき出しにして叱ったと回答したO学院大生が27%, N女子大生が25%いた。しかしながら感情は抑制されていたと回答した者もそれぞれ25%と29%おり, 有意差は認められなかった。同様に, 母親の叱責には感情が抑制されていたと回答した者がO学院大学, N女子大学に13%あり, 大学内・大学間条件で有意差は認められなかった。なお, 父親への回答欠損値はO学院大学に1, N女子大学に2, 母親への回答欠損値はN女子大学に2あった。

設問9は, 親の前での言動に関する注意に関しての質問であったが, 父親の前で表情や言葉遣いを気をつけたと回答したO学院大生が11%, N女子大生が9%いた。2群間に有意差は認められなかった。次に, 母親の前で表情や言葉遣いに気をつけたと回答したO学院大生は6%, N女子大生は8%であった。こちらも群間に有意差は認められなかった。また, 比率の差を検定した結果, 父親, 母親に関してO学院大生, N女子大生共に有意差は認められなかった。なお, 父親への回答の欠損値は, O学院大学に5, N女子大学に4あった。母親への回答の欠損値は, O学院大学に5, N女子大学に5あった。

設問10は, 人前での感情の表し方であった。比率の差を検定した結果, O学院大生, N女子大生共に, 父親から注意を受けたことがないと回答した者が多かった(それぞれ $p<0.001$)。母親からの注意に関しては, O学院大生, N女子大生共に, 有意差は認められなかった。父親への回答欠損値はO学院大学に5, N女子大学に5, 母親への回答欠損値は, O学院大学に4, N女子大学に3あった。

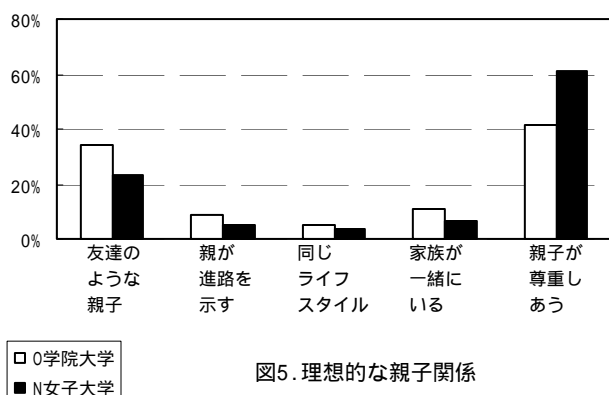
設問11から14は親子関係一般に関する質問であった。

設問 11 では、自分が親になったとき、親と同じようなしつけをするか否かについて尋ねたもので、回答は"全くその通り"、"部分的には見習いたい"、"全くそうは思わない"の 3 段階で尋ねたが、全くその通りと部分的には見習いたいを"見習いたい"群にまとめ、全くそうは思わない群と比較した。ピアソンの 二乗検定の結果、O 学院大生と N 女子大生の間に有意差が認められ、N 女子大生の方が父親のしつけを見習いたいと考えていることが明らかになった ($\chi^2=4.95, df=1, p<0.03$)。母親に関しては有意差は認められなかった。比率の差を検定した結果、O 学院大生、N 女子大生共に、しつけを含む親の養育態度を見習いたいという意見が多かった(それぞれ $p<0.001$)。なお、父親への回答の欠損値は、O 学院大学に 1、N 女子大学に 1 あり、母親への回答の欠損値は、N 女子大学に 1 あった。

設問 12 で、父親を愛しているし尊敬できると答えた O 学院大生は 57%、どちらでもないが 38%、愛していないが 6%であった。同じく、母親を愛しているし尊敬できると答えた O 学院大生は 71%、どちらでもないが 28%、愛していないが 2%であった。N 女子大生で、父親を愛しているし尊敬できると答えた者は 60%、どちらでもないが 36%、愛していないが 5%であり、母親を愛していると答えた N 女子大生は 67%、どちらでもないが 31%、愛していないが 2%であった。なお、父親への回答欠損値は、O 学院大学に 2 あり、母親への回答欠損値は、O 学院大学に 1 あった。

設問 13 の、子ども時代の父子関係をポジティブ・イメージで回想できる O 学院大生は 43%、どちらでもないが 49%、ネガティブが 8%、欠損値が 5 であった。N 女子大生ではポジティブが 49%、どちらでもないが 43%、ネガティブが 8%であった。子ども時代の母子関係をポジティブに回想できる O 学院大生は 49%、どちらでもないが 44%、ネガティブが 7%、欠損値が 4 であった。同じく N 女子大生は子ども時代の母子関係をポジティブに回想できる者が 52%、どちらでもないが 42%、ネガティブが 6%であった。欠損値は O 学院大学に 1 あった。

設問 14 では、理想的な親子関係に関する質問をおこなった。選択肢は 5 つからなり、内一つだけを選択する強制選択である。その結果、42%の O 学院大生が、「互いに独立した価値観を持ちながら、



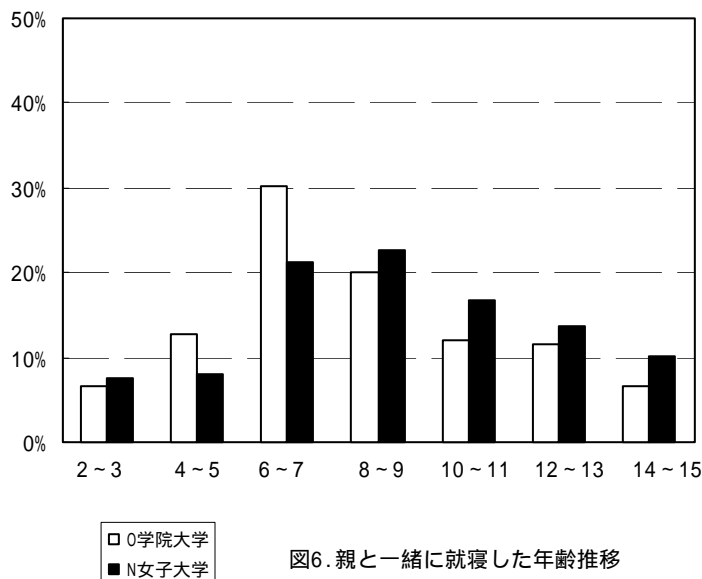
相手を尊重しあう関係」を選んだ。2 番目には「友達のように対等で常に会話がある関係」(34%) が選ばれ、3 番目には「仕事よりも、家族や子どもと一緒にいることを重視する関係」(11%)、以下、「灯台のように子どもに進路を指し示す存在」(9%)、「趣味や興味など、ライフ・スタイルが一緒の関係」(5%)の順となった。欠損値は 6 であった。N 女子大生で

は 61%が、「独立した価値観をもち、互いを尊重し合う関係」を選んだ。2 番目は「友達のように対等で常に会話がある関係」(24%) が選ばれ、3 番目には「仕事より家族を重視する関係」(7%)、以下、「灯台のように子どもに進路を指し示す存在」(5%)、「趣味や興味など、ライフ・スタイ

ルが一緒の関係」(4%)の順となった。欠損値は2であった。図5に、それぞれの回答をパーセント表示で示す。

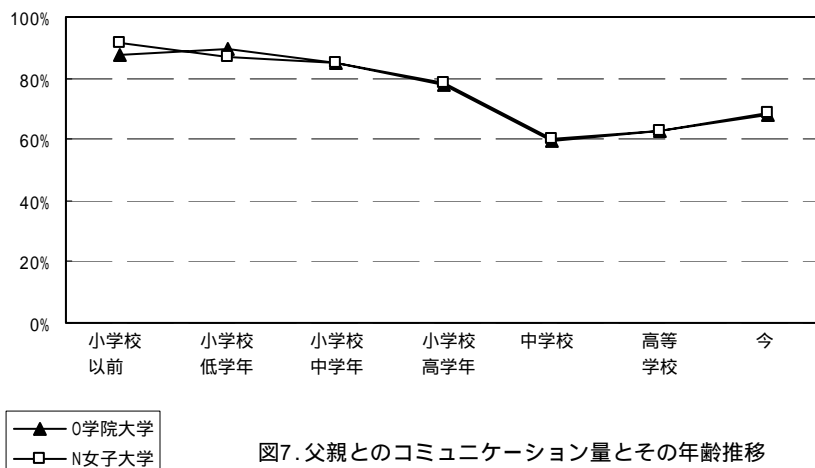
設問15で、親に対する評価を100点満点で質問したが、各カテゴリーに対する評価と総合点評価に関して、誤解した回答が見られたために、この設問は採点から除外した。

設問16は、何歳まで親(片親を含む)と一緒に部屋で就寝したかという質問である。O学院大生



とN女子大生の結果を年齢別にまとめたものを図6に示す。O学院大生では6歳頃までというのが一番多く(30%)、次に8~9歳頃まで(20%)、4歳頃まで(13%)、10~11歳頃まで(12%)、12~13歳頃まで(12%)、2歳頃まで(7%)、中学生まで(7%)という順になった。N女子大生では8~9歳頃まで(23%)、6歳頃まで(21%)、10~11歳頃まで(17%)、12~13歳頃まで(14%)、中学生まで(10%)、2歳頃まで(8%)、4歳頃まで(8%)という順になった。

設問17で、子ども時代に両親とどのようなコミュニケーションがあったかを尋ねた。O学院大生とN女子大生が、小学校入学以前、低学年、中学年、高学年、中学校、高等学校、そして現在のそれぞれの時代において父親との程度のコミュニケーションがあったと

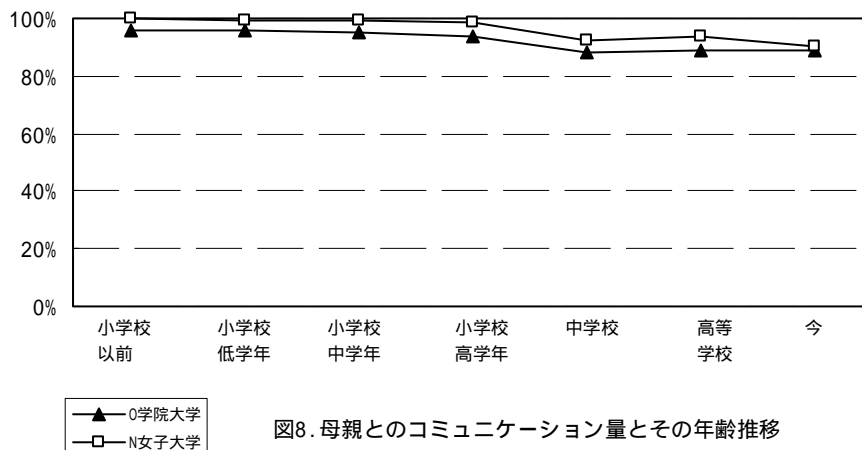


とN女子大生が、小学校入学以前、低学年、中学年、高学年、中学校、高等学校、そして現在のそれぞれの時代において父親との程度のコミュニケーションがあったと

回想したが、そのパーセンテージを図7に示す。図8は、同じくその母親版である。離婚で片親家庭

であったり、死別して回答できないと答えた学生は回答者総数から除外した。図には非常にあったと回答した者と普通を一緒にして表示した。

その結果、小学校入学以前に父親と普通程度以上コミュニケーションがあったと答えた学生は、O 学院大生で 87.3%、N 女子大生で 91.6%に上った。O 学院大生はこの小学校低学年時点（89.7%）を



最高として、以後それぞれの年代でコミュニケーション量は下降し、高校時代から再び増加へと向かい、現在は 67.8%が普通以上にあると評価し

図8. 母親とのコミュニケーション量とその年齢推移

た。父親とのコミュニケーションが最も少なくなるのが中学時代で、普通以上にあったと回答した学生は 59.4%であった。一方、N 女子大生は同じく小学校入学以前のコミュニケーション量を最高としてその後減少に向かい、中学生の時には 60.4%と最低になり、その後回復して現在は 68.8%が普通以上と評価した。また、父親とのコミュニケーションに関して、両大学の学生間に違いがあるかを U テストで検定した結果、小学校低学年の時点でのコミュニケーションは O 学院大生の方が多いと評価していることが明らかになった ($U = -2.1, p < .04$)。

母親とのコミュニケーション量に関しては、O 学院大生では小学校入学以前が最も多く、95.8%であった。以後、年齢が上がるにつれて順に低下し、最も少なかったと評価されたのが中学時代で 88%であった。現在はやや回復傾向にあり、89.2%が普通以上のコミュニケーション関係にあると評価した。一方、N 女子大生は小学校入学前が 100%であり、以後、順に減少して中学時代に 92.1%となり、高校時代に 93.6%と上昇を見せるが、普通以上のコミュニケーションがあるという者は現在さらに減少し、90.1%となっている。また、母親とのコミュニケーションに関して大学間の違いを U テストにより検討したが、有意差は認められなかった。

設問 18 は、金銭的に困ったとき親に相談するか、あるいは親ではなく友達に相談を持ちかけるかという選択を尋ねた。相談するかも知れないと相談するを一緒にして比率の差の検定を行った結果、O 学院大生、N 女子大生共に、金銭的に困ったときは父親あるいは母親に相談を持ちかけると回答した者が多かった (いずれも、 $p < .001$)。U テストで大学の差を検討したところ、有意差は認められなかった。なお、父親への回答欠損値は、O 学院大学に 5、N 女子大学に 1 あり、母親への回答欠損値は N 女子大学に 1 あった。

設問 19 は、人間関係などのトラブルに巻き込まれたとき、親に相談するかそれとも友達かについて尋ねた。比率の差の検定の結果、O 学院大生、N 女子大生共に両条件間に有意差は認められず、父

親と友達にほぼ同程度の比率で相談するという回答が得られた。一方、母親と友だちという設定に関しては有意差が認められ、O 学院大生、N 女子大生共に、友達より母親に相談すると回答した者が多かった ($p<001$)。なお、父親への回答欠損値は O 学院大学に 4、N 女子大学に 1、母親への回答欠損値は N 女子大学に 1 あった。

設問 20 は、何か悩み事があると、親か友達のいずれに相談を持ちかけるかという設問であるが、相談相手の選択に、両大学の学生間で特定の傾向は見あたらなかった。女子学生たちは、どちらかといえば父親を敬遠しているが、友達と父親の選択の間には優位差は認められなかった。しかし両者とも、悩み事相談相手としては友達よりも母親を選択した (それぞれ、 $p<001$)。なお、父親への回答欠損値は O 学院大学に 4、母親への回答欠損値は O 学院大学に 2、N 女子大学に 1 あった。

設問 21 では、親と友達、いずれを大切と考えるかを尋ねた。その結果、O 学院大生で父親を友達よりも大切に思うと回答したのは 73 人で、友達の方が大切であると回答したのは 11 人であったが、どちらとも言えないに最大の選択が集まっており、81 人がこれを選択した。欠損値は 2 であった。N 女子大生でも同様の傾向が認められており、父親の方が大切が 71 人、友達の方が大切が 13 人、どちらとも言えないが 117 人であった。欠損値は 1 であった。母親に対する回答傾向も、ほぼ同様であり、O 学院大生で母親の方が大切が 82 名、友達の方が大切が 7 名、どちらとも言えないが 78 名であった。N 女子大学の学生で母親の方が大切が 79 名、友達の方が大切が 5 名、どちらとも言えないが 118 名であった。

最後の設問 22 で、親は自分のことを愛してくれていると思うか、そうは思えないかを質問した。父親が自分のことを大変愛してくれていると思っている O 学院大生は 139 人、N 女子大生は 166 人、あまり思わない O 学院大生が 20 人、N 女子大生が 30 人、全くそう思わないという O 学院大生が 6 人、N 女子大生が 5 人いた。欠損値は O 学院大学に 2、N 女子大学に 1 あった。

母親が自分のことを大変愛してくれていると思っている O 学院大生は 149 人、N 女子大生は 182 人、あまり思わない O 学院大生が 14 人、N 女子大生が 18 人、全く思わない O 学院大生が 3 人、N 女子大生が 2 人いた。欠損値は O 学院大学に 1 あった。

考 察

目的でも述べたように、偏差値で輪切りにされた現代の大学生を対象とする質問紙調査は、よほど注意をしておかないとバイアスがかかった回答から、誤った結論を導き出す可能性がある。今回調査した、家庭における親子関係は、まさにそのようなケースの代表であろう。サラリーマンの親が子どもに残してやれる財産といえば教育であり、各種習い事や早期教育を含め、如何に子どもを勉強に動機づけるかという問題に関心がない親は一人もいないと言っても過言ではない。

しかしながら子どもたちは、義務教育を含め大学進学までの 12 年間の学校生活の中で、ある者は強い向学心に支えられていわゆる偏差値の高い大学に進学し、逆にある者は途中で挫折したり、勉強以外に興味・関心の的を移すことによって、いわゆる入り易い大学に進学してくる。もちろん大学は人生における通過点に過ぎないし、偏差値の高い大学に入学したからといって人生が成功であると

か、それが幸せにつながるとも言い切れない。

にもかかわらず、多くの親は子どもを偏差値の高い大学へ進学させたいと願い、「学び」を強いる。勉強である。それが子ども自身の動機と合致すればさほど問題は発生しないが、なかなかそうはいかない。世界には勉強以外に子どもの興味をそそるものがあふれているからである。そうして親の期待と子どもの実際がずれるとき、両者の間にコンフリクトが引き起こされたり、あるいはストレス反応を喚起したりすることも、ままあり得ることである。そこで今回は、どのような事柄で女子学生たちがその子ども時代、親から叱られてきたのか、まずその内容を検討する。

【叱られた内容】 図1に示したように、O学院大に在学する女子学生が父親から一番叱られたのは、生活態度に関連した内容であった。2番目に叱られたのがきょうだい関係、3番目がマナー、4番目が勉強関連であるが、当然、一人っ子もいるわけだから、きょうだい関係は除外して考えた方がよい。従って、生活態度、マナーなど行儀作法、それに勉強といった項目で、O学院大生は父親から叱られてきたことになる。

一方、N女子大生には、父親からきょうだい関係で叱られたと回想した学生が一番多かった。2番目が生活態度、3番目が言葉遣いである。O学院生は4番目に勉強という項目が来るが、N女子大生では家事手伝い、5番目がマナーで6番目にやっと勉強が来る。ここから、きょうだい関係を除外すると、N女子大生は生活態度と言葉遣い、そうして家事手伝いで父親から叱られたと回想している。ただ、家庭では子どもの家事手伝いを必要とする内容が極めて減少してきており、せいぜい食後の食器の片づけや自分の部屋の掃除くらいではないかと推測される。

従って親からは、どうしても学習に関連した事柄で叱られることになる。事実、O学院大生とN女子大生を比較したところ、勉強に関して叱られた量はO学院大生に多い。恐らく親は勉強しろと叱るついでに、子どもの生活態度や行儀作法についても叱っている可能性が高い。こうしてO学院大生はN女子大生より多く叱られ、一人あたりの叱責を受けた項目数も多くなる。要するに一事が万事で、小言を食らう率が高いのであるが、結局その原因をつくり出しているのが子どもの学業成績であろうことは容易に推測がつく。

ここから見えてくる、O学院大学に進学してきた女子学生の父親像は、子どもに対して細かく注意を与える父親である。一方、N女子大生の父親像は、あまりやかましく叱らない父親である。しかし、子どもの生活態度にさほど非がなく、また学校の成績も良い場合、親としては叱る理由がない。だからこそ、きょうだい間のいさかいや家事手伝いといった、ある意味で伝統的なしつけに関する注意が多くなる。逆に言えば、O学院大学に進学してきた女子学生は、それが子どもの頃からのしつけとして実行されてきたか否かは別として、生活の基本的習慣が十分に守られていなかったことで、結果的に勉強に熱が入らず、父親から注意を受けてきた可能性が高い。

では、母親からはどのような内容で叱られているのであろうか。O学院大生は生活態度関連で最もよく叱られ、次いで家事・手伝い、勉強と続き、母親からは父親から叱られた以上に多く叱られたと回想している。O学院大生同様にN女子大生も、生活態度関連でよく叱られ、家事・手伝いでも叱られているが、O学院大生よりも勉強関連で叱られることが少なかった。逆にN女子大生はきょうだい関係でO学院大生よりも多く叱られたと回想したが、先にも述べたようにこれにはきょうだいの有無

や年齢差が関係してくるので、ここから母子関係のあり方を推測することはできない。

従って、今回の調査で見えてくる母親像は、娘にうるさく小言を言うが、子どもの交友関係や趣味といった事柄には口を挟むことが少ない母親像である。これは父親も同じであり、特に父親は娘の交友相手にはほとんど口を差し挟んでいない。いずれの大学の学生も、一番叱られていないのが交友関係なのである。

その原因は2つ考えられる。一つは親の側にある遠慮である。例えば江戸時代の子育て書を読むと、そのほとんどに友だちを選ばないといけないと強調されている。『父兄訓』は林子平の手になるものであるが、「子弟を教ゆるには、遊び友だちを選ぶべし。俗諺に“朱に交われれば赤くなる”といいて、善人と交われれば善となり、悪人と交われれば悪となるなり」と書かれている。江戸時代の代表的教育者貝原益軒も、その『和俗童子訓』のなかに、「子弟を教ゆるには、先ずその交わるところの友を選ぶを要とすべし」と記している。

なぜ彼らがこのように友だちの影響を重視したのか、それは一つには同じ身分の交友相手を意識したという側面があったかもしれないが、“モデリング学習”を非常に重視したためである。異質なものと混ざり合うと同質性が薄まり、封建の身分制度そのものが危うくなる。故に、友だちを選べと忠告したのだと思われる。

もちろん大切なのは友だちだけではなく、親自身が自分を子どもの手本とすることが求められた。逆にそれは、親子の物理的・心理的距離が近かったことを示すものでもある。家業という言葉があるように、親子、特に父と男子は同じ職業に就くことが多かった。父は労働を通じて生活の様々なスキルを子に教え、子はまた父から学んだ。こうして父親には子どもの全てが、逆に子どもにも父親の全てが見えていた時代、それが江戸時代だったのである。

家庭における父親の姿が、次第に薄れ始めるのは明治中期頃からであるが、それでも戦前戦後を通じて、昭和30年までの子どもには、まだ父親の背中が見えていた。多くのサラリーマン所帯が社会学でいう「サザエさん家族」で、父親は帰宅と共に着物に着替えて晩酌をする。母親は専業主婦として家事万端を切り盛りし、子どもは2人いる。日曜日には父子がキャッチボールをし、季節には近所の遊園地にそろって出かけるというのが典型的な家族像であった。

しかしテレビが茶の間に進入し(昭和37年3月1日、NHK受信契約数1000万突破、普及率48.5%)、出稼ぎ者が100万人を突破し(昭和39年)、3C時代(カー、カラーテレビ、クーラー)といわれた昭和40年頃から、家庭における父親の姿は急速に薄くなっていく。それと共に心理的距離も遠くなり、子どもの行動に口を挟まない親が増加し始める。親たちは、効果があるかないかは別として、勉強だけをやかましく注意し、日常生活のような感情的摩擦が発生する可能性がある部分では、子どもの前からその姿を消すようになったと言える。それが、友だちとの交友関係に口を挟まない親なのである。

もう一つの理由は生活のIT化にある。平成15年6月時点での携帯電話普及率は65%を超えているが、40年前にテレビが茶の間に進入したように、今は携帯電話が茶の間に進入しているという(朝日新聞、2004/4/1)。記事によると、東京のある大学生160人に携帯電話の使い方を質問したところ、家族との食事に「電話に出る」、「メールを読む」ことがある学生がそれぞれ66%、「書くこと

がある」のが52%あったという。中学生も同様である。

ここまで携帯電話が普及すると、親は子どもが誰と通信しているのか全くわからないし、コントロールのしようがない。また、ほぼ毎日家族全員が集まって食事をする家庭が15%程度しかない現在、親には子どもの姿が見えないし、逆に子どもにも親の姿が見えない。確かに親には扶養の義務があるが、親子は完全にすれ違いで、特に父親の顔は月に数回しか見ないといったことが起こってしまう。家族機能の崩壊が始まっているが、それが今回の両親、中でも父親の子どもの交友関係に対する無関心(?)に象徴的に現れている。

【ほめられた内容】 もちろん親は、子どもを叱るだけではなくほめる。しかし日本の親はほめるのが下手である。例えばO学院大に在学する女子学生が父親から叱られた項目数は一人あたり2.61なのに対して、ほめられた項目数は2.12、母親から叱られた項目数が3.57なのに対して、ほめられた項目数は2.7である。同様に、N女子大生で父親から叱られた項目数が一人あたり2.42なのに対し、ほめられた項目数は2.23、母親から叱られた項目数が3.78、ほめられた項目数が2.94と、いずれもほめられることの方が少ないのである。

また、父親からほめられた記憶がないO学院大生は38名おり、約23%の女子学生が父親からほめられた経験を持たないと報告しているのが目を引く。ちなみに、叱られたことがないと回答したO学院大生は9%弱であるから、2倍以上の学生が、ポジティブ感情や心理的絆の強化につながる、賞賛の経験がないことになる。一方、N女子大生は父親からほめられた記憶がないものが38名おり、これは19%弱に当たる。叱られた記憶がないN女子大生は17%弱であるから、N女子大生では叱られた者とほめられた者の数値がほぼ拮抗している。

母親からほめられた記憶がないと回答したO学院大生は19名で、約11%いる。同様にN女子大生の回想でも、ほめられたことがない学生が17名おり、これは8%強に該当する。江戸時代、親は子どもを叱らずにほめて育てたが、現在はその逆で、親は子どもを叱って育てていることがわかる。では女子学生たちはどのような事柄で、親からほめられているのであろうか。

両大学とも父親は、勉強関連でほめることが一番多かったが、その絶対量はN女子大生が勝る。71%のN女子大生が勉強で父親にほめられたのに対して、O学院大生は47%に過ぎない。家事・手伝いでほめられたのが両大学ともほぼ等しい(Oが29%、Nが27%)のに比較して、勉強ではかなりの差がつくのである。

母親からほめられた内容も勉強が一位であるが、絶対量ではN女子大生にほめられたと回想した者が多かった。N女子大生の81%が勉強でほめられたと回想するのにに対し、O学院大生は61%なのである。家事・手伝いに関しては両者ほぼ等しいので、勉強でほめられる回数が両大学生間の経験の違いをつくり出している可能性が高い。ちなみに両大学の学生とも、言葉遣いやマナーなどでほめられた経験を持つ者は非常に少ない。「ら」抜き言葉や簡略語がまかり通っているように、現代社会は言葉使いに対して寛容なのである。また、箸の上げ下げまでやかましく注意した昔とは異なり、親は子どもの行儀作法についてもあまり気にしなくなってきたことがわかる。

【その他の親子関係】 最近親が子どもの行儀作法について気にしなくなったが、食事や礼儀作法などでしつけを受けたと回答した学生は、なぜかO学院大生に有意に多かった。なぜこのような結果

が出たのかの解釈は困難であるが、事実として指摘しておく。ただ、設問9で尋ねた両親への態度では、学生たちのほとんどが親の前での言動に無関心で、現代の友だち親子関係が暗示されている。

同様に、子ども時代はほとんどの学生が体罰は受けていないし、親は子どもを感情的にしかりつけもしていない。ただ、あれこれ命令されたと感じている者は多かった。それがしつけに結びついている証拠はないが、親はそれなりにあしる・こうしろと子どもに命令しているのである。

矛盾した傾向もある。父親を愛していると回答した学生はそれぞれの大学に6割近くいる。母親を愛しているという学生も、それぞれの大学に7割前後いる。にもかかわらず、子ども時代の父子関係をポジティブ・イメージで回想できるという学生は共に5割を切るし、母子関係をポジティブ・イメージで回想できるという学生も、共に5割前後なのである。これは要するに、子ども時代の親子関係が希薄になりつつあることを示唆しているのではないかと考える。

現在の家族は、それぞれの生活時間がバラバラである。一時、文部省の「ゆとり教育」で偏差値信仰は弱まったかのように見えたが、学校が週休2日制になった分、現実には塾通いが増加した。小学校高学年ともなると中学受験を控え、自宅に帰ることもなく塾に直行し、短い休み時間の間に出前されたファースト・フードをかき込む。父親は残業で、帰宅が11時近くになる。そこで登場するのが、携帯電話などのITである。

内閣府の調査によると、ITが同居家族とのコミュニケーションを豊かなものにしたと思っている国民は38%に上り、変わらないという回答が61.6%、減少したが0.1%と報告されている。配偶者間では64.2%が豊かなものにしたと回答している（平成13年版国民生活白書）。

しかし、電車やバスなどに乗り合わせて聞こえてくる会話は、「今、どこ?」とか、「電車の中」とか、自分の位置を報告するものがほとんどで、あまり意味のあるコミュニケーションがおこなわれているようには受け取れない。にもかかわらず調査で、コミュニケーション量が増加したかと尋ねられれば、確かに今どこにいるということを家族や友人間で報告しあうわけだから、その回数は明らかに増加している。

そこで政府は、IT化が進んで国民のコミュニケーション量は増加したと白書で報告する。しかし子どもが一人で、あるいは塾で食事しながら、家族のコミュニケーションが増加したと、本気で考えている人はいないであろう。それがそのまま、ポジティブ・イメージで語られることが少ない親子関係をつくり出している。

理想的な親子関係についても、同じことが言えるであろう。平成15年版国民生活白書には「母娘市場」というコラムがあり、「あなたは、母親と一緒に買い物に行きますか?」という質問への回答がある。それによると、友だちのような親子関係を肯定する意見が全体で51.2%、否定派は23.1%である。中でも20~24歳までの女性に最もその意見が高く、65.2%を占める。逆に否定派は11.6%に過ぎない。

理由については電通(株)が調べている。1位は気楽・気兼ねがいらぬ、2位は買ってもらえる・おごってもらえる、3位はアドバイスがもらえる・できるとなっている。白書は、要は「楽だから」とその動機をまとめる。

今回の調査ではその理由までは尋ねなかったが、友だち親子はやはり高いランキングにあった。し

かしどのような親子関係が望ましいのか、その理想像においては、O学院大生とN女子大生の間にはきわめて対照的な、興味深い現象が見いだされた。両大学の学生共に、「互いが独立した価値観を持ちながらも相手を尊重しあう」という、個人主義の価値観に従った親子関係を理想であるとした者が多数派であったが、20%ほどの差が認められ、N女子大学の方がより個人主義的な傾向を強く示した。2番目は友だち家族であったが、O学院大生は34%の者がこれを理想的としたのに対して、N女子大生が24%と、ここでも10%の差がついた。

2つの大学に見る理想的な親像の違いは、学生たちの価値観を色濃く反映していると思われる。すなわちO学院大生は集団主義的意識構造の下に、依存心が強い可能性がある。一方、N女子大生は個人主義的意識構造の下に、独立心が強い可能性がある。どちらの意識構造がいい・悪いという問題ではなく、この意識構造の違いが両者の行動を大きく異なるものになっている可能性を指摘できるのである。また、全体的な傾向としては、親の年齢が50歳以下の学生たちが、50歳以上の年齢の親を持つ学生たちよりも、友だち的な親子関係を評価していることをあげておかなければならないだろう。その意味では今以上に晩婚化が進むと、再び親子関係の捉えられ方が変化してくる可能性は残る。

何歳まで親と一緒に就寝していたかという設問に対し、O学院大生は6歳頃まで、つまり小学校入学で寝室を分けたと回答した学生が一番多かった。N女子大生はそれよりも遅く、小学校2年生頃に分けたという回答が一番多く、それ以後の年齢段階でも、親と寝室を一緒にしている学生がO学院大学よりも常に多かった。中学生まで一緒だったという学生も10%いるのである。

ここから見えてくる学生像がある。O学院大生は、勉強にあまり強く動機づけられておらず、親と価値観を共有し、国民生活白書に描かれた「仲よし親子」である。一方のN女子大生は勉強に強く動機づけられ、親とは価値観を別にし、キャリア志向で独立的であるという姿である。

欧米の子育てでは、親子の寝室を早ければ6ヶ月頃頃から分離する。そこでその現象だけを見て、寝室を早く分離することが子どもの自立心に結びつくとか、子どもに個室を与えることが自立心に結びつくという根拠のない子育てが、現在の日本で一人歩きしている。しかしいつ寝室を分けるか、子どもに独立した自分の部屋を確保してやるかといったことは、自立心・自立心には結びついていないという事実が、今回の調査で明らかになったといえる。

調査への回答を見る限り、親子のコミュニケーションは非常に頻繁になされているという結論が導ける。しかし、先に携帯電話の利用例で指摘したように、あるいは現代家族の生活時間がその成員によってバラバラであるように、本当の意味でのコミュニケーションが十分なされているとは考えにくい。もしそれがきちとなされているようならば、親への過剰な依存を生み出している現在の若者像は書き換えられているはずだからである。

ただ一つ、N女子大生の回答には、未だに残された健全な親子関係が覗き見える部分がある。それは自分の父親の子育てを見習って、自分も同じように子どもの社会化を図っていきたいという回答が、強くなされたことである。もちろんO学院大生も、しつけを含む父親の子どもに対する社会化教育を見習いたいと肯定的回答をしている者が多いが、N女子大と比較するときに総量としては少ないのである。またO学院大生には、全く見習いたくないという否定的な評価を下した者も1/4弱おり、必ずしも父子関係が良好であるとはいえない家族が多いことが気にかかる。父親が家族と社会の橋渡

し役を務めていないのである。母親の子育てに関しては両大学の女子学生とも肯定的に評価しており、父子関係より母子関係の方が濃密な、現代日本の子育て文化が反映されている。

【結論】 現代社会で確実に変化しつつあるのが、親子関係である。戦後は本当に大変な時代からスタートした。昭和 25 年の国勢調査によれば、18 歳未満の子を有しながら夫と死別した女性が 180 万人と推計されているし（青少年児童白書、昭和 31 版）、家族でどうにかこうにか生活しているものが全体の 49.5%、生活保護受給者 26.8%、保護を受けてはいないが極めて困難なものが 19.6%と報告されている。

住宅事情も極端に悪かった。昭和 16 年の都市部では、一人あたりの畳数が 3.8 畳であったが、昭和 30 年になってやっとほぼ同じ水準に回復する（建設白書、昭和 39 年版）。これに轍をあわせるように家族構造も変化してくる。昭和 35 年（1960）には家族構造は一つの節目を迎え、団地族といわれる所帯では平均 3.5 人の家族構造となる。ちなみに同年の一般所帯の人員は 4.14 人である。住宅の広さも持ち家で 78.4 平米となり、団塊の世代が結婚をし始めた昭和 45 年には 94.8 平米と広くなる。なお、1 所帯あたりの住宅数が 1.0 を超えるのは昭和 43 年である。

逆に 1 所帯あたり人員は減少を続ける。昭和 40 年（1965）には 3.97 人に、45 年 3.41、50 年 3.28、55 年 3.22、60 年 3.14、65 年には 2.99、平成 12 年（2000）には 2.67 人にまで減少する。これに歩調を合わせるように、女性の生涯特殊出生率も減少を続け、昭和 50 年（1975）年以後、恒常的に 2.0 を割り込み、平成 13 年（2001）には 1.33 まで落ち込むのである（人口の動向、2003）。

子どもの数は減少し続けたが、豊かさを反映して住宅の居住面積は増加し続けた。持ち家の居住面積が昭和 58 年（1983）に 120 平米を突破、61 年には 130 平米を、そうして平成 11 年には 140 平米になる（建設白書、2000）。その結果、昭和 58 年には 83%の家庭が小学生の子どもに独立した子ども部屋を与えていた。うち 16%が専用のテレビを持ち、3.5%が専用電話をもっていた。その理由は、「独立心」を養うためであった。夫婦と子ども 2 人の 4 人家族でも、それぞれ個室を確保できるだけ広くなったのである。こうして子どもたちは個室に閉じこもり、家庭内で孤立化していった。

それに輪をかけたのが、加熱する受験戦争であったことはいうまでもない。大学全入時代の今日でも、それは更に強化された形で残っている。O 学院大のある学部では、一つの学年で 2 割以上が中退し 2 割が留年する。4 年で卒業するのは 6 割という計算になるが、そのまた半数以上が定職を持たない、いわゆるフリーターとして卒業していく。偏差値が高い大学と比較して、低い大学は明らかに就職に不利なのである。このような状況に陥るのを避けるために、子どもたちは小学校時代から塾に通い、より偏差値の高い大学を目指す。そのため、極論すればサラリーマンの父親同様、家は寝るだけという子どもが増加しているのである。

情報化時代の今日、人より早く情報を処理する能力が社会経済的地位を決定する。つまり、総合して考える能力よりも分析能力が重視されるのが IT 化といわれる現代社会の特徴であるが、これはある程度までテクニックで解決する。故に、そのような訓練を早期から受けることによって、一流といわれる大学に進学することが可能になる。その効果を最もよく知っているのは団塊の世代である。こうして親からそのことを教えられた団塊の世代の子どもたちは、より一層、教育による上位階級への移動を追求するようになってきた。偏差値が全てを決定する時代が到来したのである。

偏差値という抽象的な物差しで人間の能力を測るとき、そこには親子関係を含め、豊かな人間関係を見いだすことができない。しかしこのことは既にさんざん言い尽くされているので、結論だけを述べる。

現代日本の離婚率を見る限り、思いやりや愛情で互いが強く結びつけられている家族ばかりとはいえない。各自の生活時間が異なるということは、親子や夫婦関係を分断してしまう。しかしこれを改善する方法はある。「田の字」型の、昔の家屋構造に戻ることである。少なくとも間仕切りをドアから障子・ふすまに切り替えることによって、互いの孤立感はなくなるし、現代家族にはときに煩わしくさえ思われる密度の濃い親子関係が復活する。互いがその姿を見せ合うことで、相手に対する気配り・心遣いという社会的スキルが復活する。自分勝手に生活することができなくなるからである。

子どもたちを孤立に、孤独に、自己中心癖に、共感性欠如に、不登校に、家庭内暴力や校内暴力に、いじめに、非行に、その他ありとあらゆる問題行動に駆り立てている原因を解決するためには、家屋の構造を変えるだけでいい。部屋を開け放すことで、親の疲れた姿も見えるし子どもの疲れた姿も見える。人間が本来持つ優しさは、互いが相手の現況を認識することから生まれてくる。共感的行動が欠如した自閉的人間は、例えば児童虐待の被害者のように時に子どもの社会化の過程で作られしてしまうこともあるが、本来はいない。親子とはいえ個人のプライバシーは守られる必要があるが、同時に心理的絆も守られる必要がある。欧米諸国のように、家族が常にコミュニケーションできることが、絆の維持において必要なのである。

『指輪物語：王の帰還』は2004年度アカデミー賞を総なめにしたが、この物語はホビットという小人を主人公としている。小人は子どもの象徴である。作者のトルーキンが未来は子どもの手にあることを暗示したかったのであろう。かつてアリエスが、近代になって初めて子どもが登場したと指摘したが、今再び子どもという存在が時代から鋭く問い直されているということをも指摘して、結論に代えたい。

引用文献

- 建設省（編）．（1964）．*建設白書*．東京：大蔵省印刷局
- 建設省（編）．（2000）．*建設白書*．東京：株式会社ぎょうせい
- 国立社会保障・人口問題研究所（編）．（2003）．*人口の動向：人口統計資料集 2003*．東京：厚生統計協会
- 内閣府．（2001）．*平成13年度国民生活白書*．東京：株式会社ぎょうせい
- 内閣府．（2003）．*平成15年度国民生活白書*．東京：株式会社ぎょうせい
- NHK世論調査部．（1992）．*現代親と子の生活と意識 NHK世論調査部編* 東京：明治図書
- 荘厳舜哉・荘厳（赤尾）依子．（2003）．子ども期の回想に見る現代青年の親子関係．*発達研究*，17，1-23．東京：発達科学教育センター
- 中央青少年問題協議会編．（1951）．*青少年児童白書昭和31年版*．東京：青少年問題研究会
- 山住正己・中江和恵．（1976）．*子育ての書2*．東京：平凡社 東洋文庫